

2001年8月19日

最小の部族から選ばれた王

【聖書】 サムエル記上 10章17節～27節

10:17 サムエルはミツパで主のもとに民を呼び集めた。10:18 彼はイスラエルの人々に告げた。「イスラエルの神、主は仰せになる。『イスラエルをエジプトから導き上ったのはわたしだ。わたしがあなたたちをエジプトの手から救い出し、あなたたちを圧迫するすべての王国からも救い出した』と。10:19 しかし、あなたたちは今日、あらゆる災難や苦難からあなたたちを救われたあなたたちの神を退け、『我らの上に王を立ててください』と主に願っている。よろしい、部族ごと、氏族ごとに主の御前に出なさい。」

10:20 サムエルはイスラエルの全部族を呼び寄せた。ベニヤミン族がくじで選び出された。10:21 そこでベニヤミン族を氏族ごとに呼び寄せた。マトリの氏族がくじで選び出され、次にキシユの息子サウルがくじで選び出された。人々は彼を捜したが、見つからなかった。10:22 そこで、主に伺いを立てた。「その人はここに来ているのですか。」主は答えられた。「見よ、彼は荷物の間に隠れている。」10:23 人々は走って行き、そこから彼を連れて来た。サウルが民の真ん中に立つと、民のだれよりも肩から上の分だけ背が高かった。

10:24 サムエルは民全体に言った。「見るがいい、主が選ばれたこの人を。民のうちで彼に及び者はいない。」民は全員、喜び叫んで言った。「王様万歳。」10:25 サムエルは民に王の権能について話し、それを書に記して主の御前に納めた。それから、サムエルはすべての民をそれぞれの家に帰した。10:26 サウルもギブアの自分の家に向かった。神に心を動かされた勇士たちは、サウルに従った。10:27 しかしならず者は、「こんな男に我々が救えるか」と言い合って彼を侮り、贈り物を持って行かなかった。だがサウルは何も言わなかった。

【序】 伴侶を選ぶ

皆さんは自分の生涯の伴侶を選ぶ時に、何を大事に考えて選びましたか。また選ぼうとしていますか。美しさとか格好のよさ、性格、頭のよさ、或いは健康、経済的に豊かで安定した生活が出来そうかどうか、よい家柄だとかいろいろあります。

私は神学校に入り、寮生活をしました。二年目から同室になった先輩が、私と同じように肺結核で長い療養生活を送った人で、優れた信仰の持ち主でした。私たちは毎晩一緒に聖書を読み、祈り合いました。そしてその先輩から、結婚についても深く祈る事を教えられました。

神さまは人間をご自分に似せてお造りになり、樂園に住まわせ、そこを耕し、守る仕事をお与えになりました。その上で「彼に合う助ける者を造ろう」(創世記2:18)といって、エバを造り、アダムの前に連れて来てくださったと、聖書は語っています。

神さまは私にもアダムと同じ様に、私と一体になり、一緒に牧師の使命を果たしていくパートナーを、私の前に連れて来てくださるのです。神さまが引き合わせてくださる人を、まさにその人と受けとめる信

仰がなければ、神さまのせつかくの配慮も無駄になります。そこで、神さまが備えてくださったパートナーを見分ける信仰を与えてくださいと祈りながら、教会生活を送っているうちに、喜美子と出会ったのでした。

ですから私が人生の伴侶を見つけた条件とは、一緒にキリストの僕として、キリストの教会に仕えていく人でした。「彼に合う助ける者を造ろう」と神さまはアダムにおっしゃいましたが、まさに喜美子は牧師として召された私に一番ぴったりしているパートナーとして、神さまが予め造って備えてくださっていた伴侶でした。感謝しています。

私たちには5人の子供が授かりましたが、まだ3人が結婚していません。でも私は自分の経験から、彼らが神さまから自分に与えられた仕事、使命を明確にすることが先だろうと思っています。その上で、その仕事をより良く果たしていくためのパートナーが必要ならば、与えられる。せつかく神さまから与えられた使命と能力を捨て、自分を殺してしまうような結婚はしない方がよいと思っています。

さて今日は、イスラエルの最初の王としてサウルが選ばれた所を学びます。サウルはどんな人物だったのでしょうか。また大勢の中から選ばれた理由は何だったのでしょうか。

[1] 隠れてしまったサウル

サウルが最初の王に選ばれ、即位する迄の経過はサムエル記上の9章から11章の3章にわたり、三つの物語によって伝えられています。

第一はサムエルがサウルに油を注ぐ物語で、これは誰にも知られずに二人の間で行われました。(9:1～10:16)

第二はサムエルがミズパにイスラエルの民を全員集め、くじ引きで選ぶ伝統的な方法でサウルを任命する物語です。(10:17～27)

第三はサウルがアンモンのナハシュ王を打ち破り、民全員でサウル王の即位式を行って、喜び祝った物語です。(11:1～15)

神さまはサウルを選んで、先ずサムエルと個人的に出会わせ、前もって任職の油を注がせました。その上でイスラエル全体の大集会を開かせ、公にサウルを選ばせました。王に選ばれたサウルは、皆の期待どおりアンモンの攻撃に大勝利をはくします。人々は大いに喜んでサウル王の即位式を行って、祝ったのでした。神さまは実に周到にことを運んでおられます。

今日はこの三つの中の第二の物語に注目しながら、必要な点だけ他の物語に触れることにします。この第二の物語はミズパの大集会でサウルが公式に王として選ばれた話です。日本では議会制民主主義ですから、総選挙で国会議員が選ばれ、国会の投票で行政の長である総理大臣が選ばれます。ところがイスラエルではくじ引きが神さまの意志を表わすとされました。

イスラエルの12部族が、部族を構成する各氏族ごとに並びます。そして先ず部族の代表がくじを引き、次に当たった部族の中で氏族の代表がくじを引き、更に当たった氏族の中で各家族の代表がくじを引くという順序で、人選が絞られていきました。こうしてベニヤミン族のマトリの氏族のキシユの家の息子サウルが選出されたのでした。

ところがサウルの姿が見当たりません。彼は荷物の間に隠れていたのです。恐らくイスラエルの人々の中には、王になりたいと思っていた人が、幾人もいたことでしょう。長い間王が求められてきたのですから。でもサウルには王になる野心がなかったようです。彼はこの大集会の前にサムエルから密かに王になるようにと告げられて(9:20)、油を注がれていた(10:1)はずです。どうして荷物の陰に隠れていたのでしょうか。

第一の物語によると、サウルの父キシユは勇敢な男でした。新共同訳の勇敢は口語訳・新改訳では裕福と訳されています。原語は両方の意味を持ちます。裕福な家庭に育ち、人より肩から上の分だけ背が高く、しかも誰よりもハンサムでした(9:1~2)。これだけでもスターの素質が大いにありそうです。

ろばが数頭いなくなったので父は彼に、若者を一人連れて探しに行くように命じました。彼は3日間探し回ります。その上で父が自分たちの身を心配し始めたのではないかと案じて、引き返そうとします。父親に対して実に素直な愛をもつ息子です。若者が、では神の人サムエルにお伺いを立ててはいかがですかと助言すると、それに従いました。でも空手で訪ねるのは失礼ではないかという心配りもできます。

このようにサウルは、多くの人から好かれる、人柄の申し分のない人物だったことがわかります。この人柄の良さが神さまとサムエルに気に入られて、王に選ばれたのでしょうか。

[2]小さい者だから選ばれる

サウルはサムエルから「あなたは全イスラエルの期待がかかっている人だ」と言われた時、「私は最も小さい部族の中の最小の一族のものです。どんな理由でそのようなことを言われるのですか。」と問い返しています(9:21)。全国民をまとめてリードしていくだけの力の背景がないからとても無理だと思ったのでしょうか。丁度議会のなかで一番小さな政党から総理大臣が任命されたようなものです。どうやって大政党を相手に議会をまとめればよいのでしょうか。やはり政治では数が力です。サウルの尻込みは当然の判断でありました。

ところが国民的指導者である老預言者のサムエルは、荷物の間に隠れていたサウルを皆の前に連れ出して言いました。「見るがいい、主が選ばれたこの人を。民のうちで彼に及ぶ者はいない」。彼は誰よりも背が高く、一際目立つ頑丈な勇士に見えました。戦争の時には先頭に立って戦ってくれる頼もしい武将になってくれるでしょう。民はサムエルが太鼓判を押して推薦してくれたことと、サウルの頼もしいルックスに納得して、「王様万歳」と叫んで、この決定を歓迎したのでした。何か今の日本と似ています。

しかしここで大切なのは、サムエルの推薦でもなければ、サウルのルックスでもありません。サムエル

が自分は王に相応しくないと尻込みした「イスラエルで最小の一族の者」という自覚です。

モーセが死ぬ前の別れの説教で、イスラエルが神の民に選ばれた理由をこう語りました。「あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、——ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである」(申命記7:6~8)。一番貧弱だったから神の民に選ばれたというのです。

だから神さまは、御自分の民の最初の王も、民の中で一番小さな一族の者をお選びになったのではないのでしょうか。そしてサウルが選ばれたのでした。神さまの選びは、私たち人間とまるっきり逆ですね。でもよく考えて見ると、これはとても大切な信仰です。

キリスト教の歴史で一番大きな役割を果たした人物は使徒パウロでしょう。彼は熱心なユダヤ教徒でキリスト教徒を迫害する先頭に立った人です。大勢が彼によって殉教の死を遂げさせられました。ところが劇的な回心をしてキリスト信者になり、キリスト教を世界に広める大きな働きをしました。自分たちの仲間を大勢殺した敵を赦して仲間に迎え、大きな働きをさせたのですから、当時のキリスト信者たちはすごい人たちだったと言えます。そのパウロが自分を最も小さな使徒、罪びとの頭とっています。

また癲癇の発作に苦しむ持病持ちで、医者のルカがそばについて、困難な世界伝道旅行を続けました。病気を癒すキリストの恵み、神の力を語りながら自分が癲癇の発作で倒れたら、先ず自分を治してもらってから説教しろと笑われて、伝道の妨げになります。だから神さまの栄光のために、病気を治して下さいと必死に祈りました。神さまの答えはこうでした。「わたしの恵みはあなたに十分である。(神の)力は(人間の)弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(第二コリント12:9)。パウロの弱さ、惨めさ、行き詰まりの状態に神さまの力がどう働くか、そこに信仰の証があるというのです。そこで彼は「喜んで自分の弱さを誇りましょう」と言い切っています。

この世では大きいこと、強いこと、優れているが大事にされます。小さいこと、弱いこと、惨めなことは、卑しめられて尊ばれません。大きいこと、強いこと、優れていることにしか価値は無いのでしょうか。小さいこと、弱いこと、惨めなことには意義も価値も無いのでしょうか。大きい者、強い者、優れている者だけが大事にされ、小さな者、弱い者、惨めな者が片隅に追いやられている社会は決してよいものではありません。小さな者、弱い者、惨めな者を大切に励まし、勇気を与え、それぞれに役割を立派に果たして生きて行くようにする社会こそ、良い社会ではないでしょうか。

大きな部族はとかく横暴になりがちです。それをたしなめ、小さな者を大事にしながらか国を一つにまとめていく —— そこに小さな者を大切になさる神さまの力が最もよく現れていくはずで。だから神さまは、自分は最も小さい一族の者だと尻込みするサウルを最初の王に選ばれたのでした。

[結] 自分の弱さを誇る

使命を果たしていくために、それに相応しい人が選ばれます。イスラエルは神の民です。他のどの

民よりも貧弱だったので選ばれました。その民が栄えることで神さまの素晴らしさがはっきり現れるからです。神さまの素晴らしさを証することを使命とするイスラエルの王になるのですから、サウルも自分の貧弱さを喜んで誇る信仰に立つ時にこそ、王としての使命が果せます。

優れているから選ばれるところでは、激しい競争が起こります。一握りの者だけが勝ち残り、あとは切り捨てられてしまいます。小さな弱い者に対する暖かい思いやりの欠けた、冷たいゆがんだ社会になりがちです。小さく貧しいことはよいことなのだ。弱いから選ばれるというのでは、競争がないから退化していくと、よく言われます。違います。それは弱さの中で働く神さまの恵みを知らない人の言うことです。

信仰とは神さまの絶対の愛と絶大な力の働きを提供して生きていく生き方です。自分で何もかも処理して生きる人には、神さまは働いてくださいません。「苦しい時の神頼み」は困った時だけ神さまを利用しようとしします。順調な時は神さまを邪魔にします。しかし信仰者はいつも天に向かって窓を開け続け、神さまの働きを期待して生きていきます。でも信じていますから、自分が小さくても、弱くても、卑しくても絶望しません。信じますから自分の最善を尽くして生きていきます。その時神さまの恵みが輝いてくるのです。

サウルが最も小さい者だから王に選ばれたということを、よくよく覚えておきたいものです。そして小さな者、弱い者、卑しい者を大切に、恵みを注ぎ、豊かな生涯を送らせて下さる神さまの素晴らしさを証する者になりましょう。「喜んで自分の弱さを誇ります」という信仰に立ち続けて生きていきましょう。